

## 第二言語習得者の日本語構文理解のために

中 野 はるみ

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

### 要 旨

読んで理解しやすい文章は、いわゆる5W1Hが整った文の集まりであると考えられている。しかし、文の構造と「文の部分」とを詳細に分析していくと、単語と単語の組み合わせである連語の知識を学ぶことの必要性が浮かび上がってくる。

本論稿は、読んで理解しやすい文章を書くための練習問題を分析し、その問題を解いた第二言語習得者の誤答から、どのような点が難解なのかを解き、いかに教えればいいのかを考察していく試みである。

### キーワード

構文論、第二言語習得者、文の部分、連語論

### はじめに

文章を書く技術は、話す技術とは異なっている。うまく話せた音をそのまま書いたとしても読み返すと、その文は冗長であったり無駄なものが多いと感じられたりするし、また逆にことばが足りず理解しにくい部分があったりする。特定の聞き手を前にした談話と不特定多数の読み手を考慮した文章とは、基本的に異なっているはずである。

聞き手（相手）の反応をよんで、ことばを紡ぎだす談話では、できるだけことばを少なくして情報を多く伝えようとする。一方、読み手の反応がよめない書き手は、できるだけ誤解が生まれないように、自分の伝えたい情報を正確に相手に伝えようとして文章を書くのである。しかし、自分がわかっている情報は、ついつい舌足らずの表現になってしまいがちである。自分だけが知っている情報を、その情報を全く知らない読み手に伝えるためにはどのような点に留意する必要があるだろうか。そして、そのような必要点を訓練する方途はあるのだろうか。

本論稿は、読んで理解しやすい文章を書くた

めの練習問題を分析し、その問題を解いた第二言語習得者の誤答から、どのような点が難解なのかを解き、いかに教えればいいのかを考察する。

読んで理解しやすい文章は、いわゆる5W1Hが整った文の集まりであると考えられている。日本語文章能力検定協会が昨年まで主催していた日本語文章能力検定の公式テキストにそのように記されているのだが、実際の構文は複雑であり、5W1Hに限定されてはいない。そのことを明らかにしていき、まだまだ十分とはいえないがたい日本語の文法研究、とくに構文研究の一端を解いていきたい。

会話（音）習得は、自然のうちに身につく学習によった方が滑らかで効率的だといえようが、文章（文字も含む）習得は、たとえ母語話者であっても練習なしに自然に身につくことはない。非母語話者にとって文章技術のスキルアップは、意味と日本語構文の理解なくしては上達しないといえるのである。

# I . 日本語の構文

## I 1 . 文の部分

構文論すなわち文の構成に関する研究は、文中各部の役割を明らかにし、文全体の成立事情に関するものである。日本語の構文論研究史上には三上章の主語廃止論などがあるが、言語が現実の姿を映し出すものであり、人間が生活していく上で欠かせないものになっているということは、どの言語種においても同様であるから、その異なり方は文化・文明によって違って当然なのであるが、構文の基礎が言語によって異なることはないだろう。

日本語研究が現実生活から離れ、言語のみの研究に陥ったとき、「述体の文」や「入子型」などの諸研究が開花したのだが、それは、生活と切り離された言語研究の陥穽であった。言語はどのような人種にあっても、人間生活とは切り離すことのできない普遍的な要素である。

言語とは、ひとまとまりの現実のできごとやありさまを、現実のものごと、運動、性質などの側面をひっぱりだしてきて、それを単語であらわし、その単語を組み合わせて文にしてあらわすという、分析と統合の記号構成なのである。二つ以上の単語からなる文は、単語がただ数珠つなぎに並んでいるだけのものではなく、単語は陳述によってまとめられながら、文のなかで一定の役わりをはたし、直接、間接に全体の文にたいして、「文の部分」の関係をたもっている。

本稿では、文はいくつかの部分によって組み立てられていると考え、その「文の部分」に関しては基本的に下記の10分類<sup>1)</sup>を使用して論じることにする。

- ・主語    ・述語    ・補語    ・修飾語
- ・状況語    ・規定語    ・陳述語    ・独立語
- ・側面語    ・題目語

しかし、この10分類は大きな枠組みである。それぞれの分類の下位区分については、さらに細かい文中の役割を論じなければならない。文の部分同士の関係（他の単語に対する関係）や

品詞形式などによって、つぎのような意味内容分析にしたがって解析していくことにする。

## I 2 . 「10種の文の部分」の意味内容

「文の部分」についてはラテン文法以来の文法用語であり、本来、言語研究では当たり前の用語であったはずだが、「西洋語研究の用語」というレッテルがつけられ、日本語では否定的に捉えられたようで、橋本文法では文が「文節」に区分され、修飾被修飾の関係だけで文論が語られてきた。

本稿では、つぎの10種で説明をしていくのだが、まず簡単に、その「文の部分」の役割を述べておく。

### I 2 1 . 主語とは

主語とは、その文で述べる「ものごと」の部分である。言語は、現実のできごとやありさまをあらわすばあい、ひとまとまりで途切れのない現実の森羅万象を単語に切り取ってあらわす。主語とは、その現実のひと区切れで、そこに焦点をあてたということである。

### I 2 2 . 述語とは

述語とは、主語について述べる部分である。

### I 2 3 . 補語とは

補語とは、文のほねぐみ（主語と述語）を補い、文を拡大する部分であるが、主語で示されなかった他の参加者を補うのが補語の役目であり、役割の構造によって、さらに下記のように分類することができる。

#### I 2 3 1 . 直接対象

- a . 働きかけの対象（人・もの）
- b . 作り出す対象    c . やりとりする対象
- d . 心の動いていく対象

#### I 2 3 2 . 間接対象

- a . くつつくところ
- b . とりはずすところ    c . あいて
- d . 材料    e . 道具    f . 態度の対象

#### I 2 3 3 . うごきに関わる場所

- a . ゆきさき    b . 出発点
- c . とおりすぎるところ

d．とおりゆくところ

e．ありか（有無や増減に関わる状態）

I 2 3 5．状態や性質の対象

I 2 3 6．可能動作の対象

I 2 3 7．状態や性質がなりたつための  
基準

I 2 4．修飾語とは

修飾語とは、述語の示す動きや状態のようすや程度を付け加えて文を拡大する部分である。

I 2 4 1．程度の修飾語

I 2 4 2．量をあらわす修飾語

I 2 5．状況語とは

状況語とは、できごとやありさまがなりたつ状況を述べる部分で、文を拡大する部分である。

I 2 5 1．ときの状況語

I 2 5 2．場所の状況語

I 2 5 3．原因の状況語

I 2 5 4．目的の状況語

I 2 6．規定語とは

規定語とは、「ものをあらわしている部分」がどんな特徴をもっているか、どれであるかを示す部分で、文を拡大する部分である。

I 2 6 1．飾りの規定語

I 2 6 2．きめつけの規定語

I 2 7．陳述語とは

陳述語とは、文をあらわすことがらのくみだてには加わっていない。述語とともに述べ方をあらわす部分で、文を拡大する部分である。

I 2 8．独立語とは

独立語とは、「さけび」・「よびかけ」「うけこたえ」など、他の文の部分と直接結びつかない部分である。

I 2 2．側面語とは

側面語とは、述語の属性が主語のどの側面であるかをあらわすための部分で、文を拡大する部分である。

I 2 2．題目語とは

題目語とは、述語との関係は直接なく、題目としての部分で、文を拡大する部分である。

なお、文には一語文と二語文が存在する。一語文とは、目の前にあるできごとを述べたりする文で一語だけでできている。たとえば、「バス!」「雨!」などである。一語文では、目の前にないできごとは述べることができない。過去・未来・確かさ・不確かさをあらわすために、二語文（二語以上で構成された文）が必要になったのである。

二語文とは、ことがらは何よりもまず「ものごととその属性（主体とその動作・ものごととその性質など）に分析され、それらを統合した表現である。「文によって伝えられることがらは、文の客体的な側面であり、陳述は文の主體的な側面であるといえる」<sup>2)</sup>のだが、「文の部分」をその側面ではっきりと区分するわけにはいかない。しかし、大まかに述べると、上記の文の部分のうち、「陳述」にかかわる部分は、もちろん、「述語」部分であり、「モダリティ」「とき」「みとめ方」などを表している。「主語」も人称に関わって「ていねいさ」を表し、「陳述語」「独立語」「題目語」も、それに準ずるといえよう。それにたいして、「ことがら」を客観的に表わす部分は、「主語」「述語」「補語」「修飾語」「規定語」「状況語」「側面語」である。

## Ⅱ．第二言語習得者の日本語構文の誤り調査

### Ⅱ 1．調査の目的および方法

第二言語習得者が書く文章は、読んで理解しにくい。読み手が理解しやすい文章を書くための練習は、もちろん作文を数多く書かせることであろう。しかし、やみくもに書かせ、添削を繰り返しても、自分が書いた文章自体の誤りには気付くのだが、その誤りにたいする反省が次の文章作成になかなかつながらない。

そこで、筆者は構文に関する練習問題を第二言語習得者に解かせた上で、それらを分析し、その誤りから、いかに教えればいいのかを考察することにした。一般のテキストでは、読んで理解しやすい文章は、いわゆる 5W1H が整っ

た文の集まりであると考えられている。しかし、上記でみてきたように実際の構文は複雑であり、いわゆる5W1Hに限定されてはいない。そのことを明らかにしていき、談話研究に流されがちな昨今の言語研究に不足している部分を明らかにしていきたい。

調査には、『日本語文章能力検定4級』（文検4級）の第5章「文の組み立て」に関する過去の検定問題10編（平成16年度～平成19年度）を使用した。それぞれ5問構成だったので、合計で50問調査することとなった。

調査対象者は日本語能力試験2級相当以上の第二言語習得者（留学生）33名（中国人24名・韓国人8名・米人1名）であり、調査期間は平成21年前期であった。

## Ⅱ 2 . 調査結果および考察

### Ⅱ 2 1 . 調査結果

つぎの表では、上記の過去問10編を問題A～Jとし、それぞれ正解となっている「文の部分」を明示している。そして、日本人と第二言語習得者それぞれの正答率をあげ、その右枠に両者の正答率の差をあげた。さらにその右には第二言語習得者33名の正答率を、上位・中位・下位・そして韓国人のみとに分けている。韓国人枠を特に設定したのは、文の組立てが近似している韓国語母語話者と、孤立語で文の組立てが日本語とは大きく異なっている中国語母語話者などの正答率を比較検討するためである。

表1 問題の「文の部分」と正答率

単位は%

問題		文の部分	正答率		正答率 の差	第二言語習得者33名の正答率内訳			
			日本人	第二言語 習得者		上位 5名	中位 24名	下位 4名	韓国人
問題 A	1	規定語名詞修飾	98	94	4	100	96	75	100
	2	補語ヲ格	98	85	13	100	88	50	100
	3	副詞	98	67	31	100	67	25	100
	4	主語ガ格	91	64	27	100	58	50	75
	5	<b>規定語ノ格</b>	<b>94</b>	<b>39</b>	<b>55</b>	80	38	0	38
問題 B	1	主語ガ格	98	70	28	80	79	0	88
	2	状況語（デモ）	78	55	23	80	54	25	63
	3	<b>規定語（タメノ）</b>	<b>71</b>	<b>27</b>	<b>44</b>	60	21	25	38
	4	規定語ナ形容詞	73	42	31	80	38	25	63
	5	補語ヲ格	98	82	16	100	83	50	63
問題 C	1	主語ガ格	82	78	4	100	74	75	88
	2	補語二格	97	66	31	100	70	0	75
	3	状況語（デハ）	89	66	23	100	74	25	88
	4	規定語ノ格	95	75	20	80	74	75	63
	5	主語ガ格	72	60	12	60	65	25	63
問題 D	1	副詞	75	61	14	100	54	50	63
	2	規定語ノ格	85	91	6	100	92	75	100
	3	補語ト格	59	42	17	80	33	50	50
	4	規定語ノ格	73	45	28	40	46	50	63

	5	補語ヲ格	85	21	64	40	21	0	25
問題 E	1	状況語	95	94	1	100	87	100	100
	2	補語ヲ格	89	81	8	100	78	67	88
	3	規定語ノ格	93	87	6	100	83	100	75
	4	補語二格	90	87	3	100	91	33	88
	5	規定語ノ格	61	84	23	100	78	100	88
問題 F	1	補語デ格	不明	47	不明	20	50	67	38
	2	補語二格		88		100	88	67	88
	3	主語ガ格		84		100	88	33	100
	4	補語ヲ格		63		80	58	33	100
	5	副詞二格		69		80	71	67	75
問題 G	1	主語ガ格	69	72	3	60	77	75	29
	2	状況語	79	58	21	80	55	50	43
	3	副詞	64	55	9	80	45	50	71
	4	状況語	75	58	17	60	64	25	43
	5	状況語デ格	83	90	7	100	83	100	86
問題 H	1	主語ガ格	75	80	5	80	82	67	100
	2	補語二格	80	77	3	100	82	0	100
	3	主語ガ格	40	30	10	60	23	33	38
	4	規定語ノ格	55	60	5	60	59	67	75
	5	補語二格	83	73	10	80	77	33	88
問題 I	1	補語二格	89	79	10	100	83	25	88
	2	補語ヲ格	81	58	23	80	58	25	75
	3	補語デ格	58	21	37	60	17	0	50
	4	補語二格	80	45	35	100	38	25	63
	5	規定語ノ格	57	45	12	80	42	25	38
問題 J	1	規定語ノ格	86	45	41	60	50	0	75
	2	補語ヲ格	97	91	6	100	100	25	100
	3	補語ヲ格	96	85	11	100	92	25	88
	4	補語二格	92	64	28	100	63	25	50
	5	補語ヲ格	85	67	18	80	63	75	100

(ゴチックは正答率の差が大きい問題)

文検は過去問題集の別冊として刊行する標準解答の欄に正答率を載せている。受験者の多くは日本人母語話者だと思われるので、正答率の差は、母語話者と第二言語習得者の差といえる。だから、この表から導き出せる正答率の差が大きい「文の部分」が、第二言語習得者にとっ

て、難しい問題だといえよう。

そこで本稿では、日本人母語話者と第二言語習得者の正答率の差が大きかった4つの問題に焦点をあてて考察していく。それらは、「正答率の差」の欄に か を付している4問で、差が44%～64%あった。ゴチックにした各問の

「文の部分」は、問題 A の 5 問目と問題 B の 3 問目が 規定語 で、問題 D の 5 問目と問題 F の 1 問目が 補語 であった。

ついでながら、第二言語習得者の正答率の方が高かった問題（ を付した ）が 6 問みられたのは、興味深い点であるが、その点については本稿ではふれない。

## II 2 2 . 考察

つぎに、それぞれの問題とその難しさの解析をしてみよう。表 1 から導き出せた「規定語」と「補語」の 2 分類に分けて分析する。なお、問題点を明らかにするために長くなるが、それぞれの問題を記載し、それらの誤りに焦点をあてて分析する。なお、問題 A・B と問題 C・D は答えの選択方式がことになっているが、問いに関してはほぼ同じである。また、問題 C・D は、答えを挿入する場所は指定されていない問題となっている。

### II 2 2 1 . 規定語に関する考察

#### II 2 2 1 1 . 問題 A (5)

つぎの問題を読んで、後の問いに答えなさい。  
 ・日本の代表的な淡水魚「メダカ」は、( 1 ) 各地の池や沼、水田、水路に生息しており、飼育が簡単な魚だ。( 2 ) 飼うときはあまり大きくない、ろ過装置のついた水そうを用意する。水は、くみ置きをのものを、生息していた水と同じ水温にして水そうに入れ、えさは市販の金魚のえさを食べやすいように( 3 ) くだいてやる。えさは多すぎると( 4 ) 汚れるので、一日に数回、五～十分ぐらいで食べ終える量を与える。卵が産みつけられるように、必ず水草を入れてやることや、( 5 ) ガラス面についた藻を食べてもらうためにタニシを入れることも大切である。

問 この文章の意味がよくわかるようにするに

は、( 1 ) ~ ( 5 ) のそれぞれに、ア ~ コのどの語句を補うのが適当ですか。補うべき語句の記号を解答欄にマークしなさい。ア ~ コの語句は一度しか使えません、

ア．ほかの魚で イ．水が ウ．食べ残し  
 エ．北海道を除く オ．水そうの カ．水温を  
 キ．メダカを ク．泳ぎ方に ケ．細かく  
 コ．水草は

この問題の(5)は「オ．水そうの」が正解であったが、第二言語習得者の正答率は39%であった。日本人学生の正答率は94%もあり、母語話者は間違えない部分である。ではなぜ第二言語習得者は誤ったのであろうか。「水そう」という単語はすでに 2 行目に出ていて、単語の意味が理解できなかったわけではなさそうである。この下線をつけた文は、二重下線部分「～や～も大切である」という大きな骨組みでできている。それが理解されていなければ、誤答をみちびくことになる。

つぎの表 2 は第二言語習得者33名の解答と解答率を表わしたものである。

表 2 をみると、「オ．水そうの」と答えた13人の約半数(7人)が、「ア．ほかの魚で」や「コ．水草は」と答え、誤答率が21%となっている。正答の「オ．水そうの」は、「ガラス面に」を限定したノ格の規定語である。規定語とは、いわゆる「どんな」や「どれ」にあたる文の部分である。ひと・もの・ことがらの特徴や「きめつけ」を表わす部分であり、もっともポピュラーな規定語である、名詞連語「ノ格の名詞+名詞」は多種多様であるが、「水そうのガラス面に」という連語は、「関係具体化のむすびつき」<sup>3)</sup>を表わすうち、「ものの全体」と「も

表 2 問題 A の 5 問目の解答率 (33 名)

解答記号	ア	ウ	オ(正解)	ク	ケ	コ
人数(人)	7	3	13	1	2	7
解答率(約%)	21	9	39	3	6	21

のの部分」とのむすびつきである。「魔法瓶の蓋」「電話の線」「本箱の引き出し」などと同じ結びつきで、「ガラス面」「蓋」「線」「引き出し」等のカザラレ名詞はなんらかの「ものの部分」として名づけられた〔部分性名詞のカテゴリー〕に所属するのだが、そのようなカザラレ名詞がカザリに全体や本体を指定するばあい、このむすびつきになる。カザリ名詞である「全体や本体」を指定してはじめて、「なんの」部分が理解できるのである。

この問題にあるように「ガラス面に」という「部分を表出する単語」が急に表出されると理解しにくい、「水そうのガラス面」というように、「水そう」という本体を表出し、ノ格の規定語で「ガラス面」がカザられると、「どこについたガラス面」かがきめつけられる。なお、この構造は下記のような「二格の名詞と動詞のくみあわせ」連語構造から導きだすと理解されやすい。

・藻が（水そうの）ガラス面に ついた

水そうのガラス面についた藻

～ガ + ～ニ + くつつき動詞

「ア・ほかの魚で」の誤答者は、「で」の機能を知らず、「コ・水草は」の誤答者は、「水草は～大切である」と考えたのかもしれない。いずれにしろ、上記の動詞連語から派生した名詞連語構造を学習する必要がある。また、

・タニシが 藻を 食べる タニシに 藻を 食べてもらう 藻を 食べてもらうために タニシを（入れる）

のように、ガ格から二格への変更なども加えて学習されなければならないだろう。

## Ⅱ 2 2 1 2 . 問題 B (3)

・病気やけがによって( 1 )機能しなくなった人に、自己または他人の臓器を移植することを臓器移植という。ようやく( 2 )脳死移植が容認され、心臓移植や肝移植、肺移植などの移植医療が定着しつつある。心臓は一人に一つしかなく、しかもつねに動いていることが必要のため、脳死状態でしか( 3 )心臓を得る道はない。一方、肝臓には再生能力があるので、( 4 )人から提供を受けた肝臓を用いた生体肝移植も可能である。しかし、病気でもない人のからだを傷つけてまで( 5 )取り出すことへの批判があるのも事実だ。

ア 心臓移植も イ 移植のための

ウ 脳死者にも エ 臓器が

オ 遺伝子治療とは カ 健康な

キ 日本でも ク 再生すると ケ 臓器を

コ 心停止を

この問題の(3)は「イ・移植のための」が正解であったが、第二言語習得者の正答率は27%であった。日本人母語話者の正答率は71%なので、母語話者にとってもやや難しい問題だといえよう。つぎの表3は第二言語習得者33名の解答率を表わしたものである。

この表3からいえることは、正答率27%よりも、「カ 健康な」を選択した誤答率36%のほうが、9%高いという事実である。確かに、「健康な心臓」という「ナ形容詞+名詞」連語はその下線文には適合する。しかし、つぎの波線を付した文の(4)に「カ 健康な」を選択しなければならない。では、(3)で「カ 健康な」を選択した第二言語習得者(12名)は、(4)にはどの記号を選択しているのだろうか。つぎの表4がそ

表3 問題Bの3問目の解答率(33名)

解答記号	ア	イ(正解)	ウ	オ	カ	ク	ケ	コ
人数(人)	1	9	3	2	12	2	1	3
解答率(約%)	3	27	9	6	36	6	3	9

表4 「カ」選択第二言語習得者の4問目の解答率(12名)

解答記号	イ	ウ	キ	ク	ケ	コ
人数(人)	2	5	1	2	1	1
解答率(約%)	17	42	8	17	8	8

の解答率である。

この表をみると、「ウ 脳死者にも」を選んだ第二言語習得者が42%である。苦肉の策で選んだのだろうが、ウを選べば、「脳死者にも人から提供を受けた肝臓を用いた生体肝移植も可能である」という文になり、「脳死者に移植が可能である」ことになる。まず脳死者に移植することはないだろうし、この文章の意図とは異なる文になる。

3問目に「カ 健康な」を選択させる方途は、「人」をどのような機能をもつ語彙として把握させるかということであろう。「人」ということばは通常、「どんな人」なのかと説明する部分、つまり「人」を規定する部分をもつ名詞連語が多い。他の動物やモノなどと対照的に使用され「人間」そのものを表わすばあい等は、「人がいる」等、規定語なしで使用されるときもあるが、一文で説明を完結させる文は、規定語+「人」の名詞連語タイプが多いだろう。日本語は他の言語と比べると、常用語彙の多さにその特質がある。ほぼ同じ意味を有することばであっても、機能語彙としてはその使用に異なりが生じるばあいがある。「人」「方」「者」などが、「人間一般ではなく、ある特定の人間」<sup>4)</sup>の意味であり、「人間」と比べると語彙機能に差異があることを学習するいい機会である。また、「しかし」以降をよく読み、「病気でもない人のからだを傷つけてまで( 5 )取り出すことへの批判があるのも事実だ」の「規定語+人」の名詞連語に気づいていたら、誤りは防げたであろう。

## II 2 2 2 . 補語に関する考察

つぎの2問題は、「どの部分が抜けているか」を問うもので、挿入部分は指定されておらず、問われてもいない。3択の問題で易しそうだ

が、誤答率はむしろ高くなっている。1～5の各文の前に全文が読めるようになっていて、「右の文章には言葉が足りない部分があります。この文章の意味がよくわかるものになるように、1～5のそれぞれに対して、後にあげるア、イ、ウの中から最も適当なものを一つ選び補います。回答欄の記号をマークして答えなさい」と問うている。ここでは、全文は掲載せず問題部のみあげる。

## II 2 2 2 1 . 問題D-(5)

1 . 水泳の四大泳法の中で最も歴史が新しいバタフライは、平泳ぎの一泳法で、1933年にアメリカのメイヤース選手が、水をかいた手を水中ではなく水上で前にもどしたことから発達したと言われている。

(ア キックが イ 元来は ウ 世界でも)

2 . オリンピックヘルシンキ大会では、平泳ぎの決勝出場者全員がこのスタイルで泳いだという。

(ア 1952年の イ 選手が ウ 速くて)

3 . 当時のルールでは左右対称の泳ぎでキックがかえる足であれば認められたので、この泳法は違反にはならなかった。

(ア バタフライも イ 1952年には ウ 平泳ぎだと)

4 . しかし、従来の平泳ぎに比べてとても速く泳げることがわかり、以後、このスタイルは禁止され、バタフライが独立したのである。

(ア 水中でもどすより イ 平泳ぎと ウ 平泳ぎ種目での)

5 . 現在、バタフライで一般的に行われるドルフィンキックは、日本の長沢二郎選手がかばいながら泳いでいて考えつき、その後改良して完成させたものである。

(ア 彼が イ 脱力して ウ 痛めたひざを)



この問題の(5)は「ウ 痛めたひざを」が正解であったが、第二言語習得者の正答率は21%であった。日本人母語話者の正答率は85%なので日本人にとっては易しい問題だといえよう。つぎの表5は第二言語習得者33名の解答率を表わしたものである。

表5 問題Dの5問目の解答率(33名)

解答記号	ア	イ	ウ(正解)
人数(人)	20	6	7
解答率(約%)	61	18	21

この表をみると、「ア 彼が」を選択した第二言語習得者が61%もいて、正解の3倍の人数になっている。約3/5が誤ったことになる。この文構造は第二言語習得者にとって難解だといことがわかる。日本語には、いわゆる「が」という格助詞と、「は」という係助詞があり、いわゆる主格部分が難解なのである。この5問目の文構造はつぎの①のような元の文の下線部「ドルフィンキックを」を、「ドルフィンキックは」と、係助詞「は」によって「とりたて」て②のような文構造にしたものである。分かりやすくするために、規定語部分や修飾部分を除いて記した。

①日本の長沢二郎選手がドルフィンキックを考えつき、その後改良して完成させたものである。

②ドルフィンキックは、日本の長沢二郎選手が考えつき、その後改良して完成させたものである。

この文構造は問題とは直接、関係があるわけではない。しかし、「ア 彼が」を選択した第二言語習得者が多かったということは、この文構造の理解ができていなかったことに起因するので重要なのだ。問題は、修飾部分「かばいながら泳いでいて」の「かばう」の補語のヲ格の必要性なのだが、「かばう」という動詞の意味が理解できていなかった可能性が大きい。この

ように、第二言語習得者の誤りの原因は文法や文構造理解の未習熟にとどまらず、むしろ語彙理解の少なさに起因することは言うまでもない。

## II 2 2 4 . 問題 F - (1)

1. 私たちはいつも無意識にまばたきをしている。目をうるおしたり、目で何かを見るときに焦点を合わせやすくしたりするためである。

(ア 涙で イ まばたきに ウ 目が)

2. こうした、無意識のうちに自然に起こるまばたきを「周期的まばたき」と言う。大人の周期的まばたきは、平均すると20回程度である。

(ア 意識することなく イ 回数は ウ 一分間に)

3. ただしこれはリラックスしているときの話である。読書中やパソコン使用中、車の運転中などは少なくなる。

(ア 二十回程度なのは イ 集中すると ウ 回数が)

4. 一般には、集中して見なければならぬときほどまばたきの回数が減るようである。

(ア 集中するため イ 何かを ウ 無意識で)

5. まばたきの回数が減るとドライアイや視力低下などを引き起こすこともあるので、時にはまばたきをして目を休めるとよい。

(ア 病気が イ 意識的に ウ 目のうるおいで)

この問題の(1)は「ア 涙で」が正解であったが、第二言語習得者の正答率は47%であった。日本人母語話者の正答率は不明だが日本人にとっては一般的に易しい問題だといえよう。つぎの表6は第二言語習得者32名の解答率を表わしたものである。(1名欠席)

表6 問題Fの1問目の解答率(32名)

解答記号	ア(正解)	イ	ウ
人数(人)	15	5	12
解答率(約%)	47	16	38

この表をみると、「ウ 目が」を選択した第二言語習得者が38%もいる。その誤答をどの部分に挿入しているのかは、下記の①～④の挿入箇所と表7に見てとれる。問いにはなかったが筆者は、第二言語習得者がどの部分に入れるかを調査した。その挿入か所<sup>5)</sup>は下の文中の①～④であった。

・私たちは ① いつも無意識に ② まばたきをしている。目をうるおしたり、目で何かを見る ③ ときに ④ 焦点を合わせやすくしたりするためである。

表7 「ウ 目が」の挿入箇所比率

挿入箇所	①	②	③	④
人数(人)	3	2	1	6
比率(約%)	25	17	8	50

表7では、④の箇所に挿入した第二言語習得者が半数いたが、彼らは全体の正答率が高かった。①と②に挿入した学生は主述の関係、すなわち「目がまばたきをしている」と考えたのであろうし、④も「目が焦点をあわせやすくしたりする」と主述の関係である。この関係である①②④の誤答率は92%になる。あながち誤答ではなさそうに思われるが、「まばたき」という複合語が、「目(ま)が」主語+『はたく』の名詞形『はたき』から生まれていると理解できれば<sup>6)</sup>、これらの誤りも少なくなったであろう。しかし、もっと重要なのは、「～デ～ヲうるおす」という動詞連語である。「うるおす」という動詞は「つくる」「編む」等と同様、材料や原料となる構成要素を「デ格」で補う必要が動詞連語である。「涙で」がなくては、「何でうるおすのかわからない」ということに気づく必要があったわけである。

以上の分析からあきらかになったことは、文構成の「文の部分」に関する学習不足はもちろんであるが、その部分構成要素になる連語とくに「名詞連語」と「動詞連語」<sup>7)</sup>の学習不足であった。「文の部分」になるのは単語だけでは

なく、分かちがたく結ばれている「連語」だからである。とくに、補語と述語の関係は、動詞連語がそのまま文の構成部分になるのだから、連語を学んでおけば補語の必要性がわかり、「文の部分」の欠落に対する視点が養成されてくると思われる。I 2 3.「補語とは」で抽出した部分は、動詞連語のむすびつき方の一端である。

## おわりに

作文指導は一過性の誤りの指摘に陥ることが多い。日本人母語話者指導にしろ、第二言語習得者指導にしろ、その傾向が強いようであるが、とくに第二言語習得者の指導においては、いわゆるテニヲハの誤りの修正に終わりやすい。文構造から指導をしていこうとすると、文検の5W1Hに関するこのような問題から指導を重ねることが肝要であろうが、しかし、本稿でみてきたように、文構造は「WHO、WHAT、WHERE、WHEN、WHY、HOW」「が、を、に、と、より、から、で、ので、・・・」<sup>8)</sup>だけではないことは明らかである。もっといえば、人を取り巻く現実の諸相と文の構造とを照らし合わせながら、構文を教えていくことが重要なのであろう。

第二言語習得者の文構造に関する誤りからみえてくるのは、「文のどの部分が充足しないと主体の意図する文が構成されないのか」という、ごく基本的な文構成に関する知識、もっといえば単語のくみあわせの単位である「連語」をしっかりと教える必要があるということだろう。文が読み手にしっかりと伝わるためには、書き手は単語と単語のむすびつきを大切にしてい、できるだけ詳細に必要な部分を挿入していく必要がある。書くという作業のまえに上記のような問題を多数練習することも、自分の書きたい文が書けるようになるために必要であるし、読み方の訓練にもなるだろう。その点では多少問題点を含む「文検」ではあるが、再開が望まれる<sup>9)</sup>。

注

- 1) 「文の部分」および分類は、高橋太郎他著(2005)『日本語の文法』ひつじ書房 pp.8-17
- 2) 鈴木重幸(1972)「文法について」『文法と文法指導』むぎ書房 . p.159 .
- 3) 中野はるみ(2004)『名詞連語「ノ格の名詞+名詞」の研究』亜細亜技術協力会海山研究所 p.95 .
- 4) 「人」「方」「者」「奴」に関しては、つぎのような「使い分け」注釈がなされている。  
四語とも、前に「あの」「その」や、様子を説明する言葉がついて、他の一般の人から区別した人間をさす。  
(渡邊静夫(1994)『使い方の分かる類語例解辞典』小学館 . p.320 .)
- 5) 筆者は挿入か所を指定せず自由に挿入させた。
- 6) 「まばたき」は、「まぶたを閉じて、またすぐ開くこと・またたき」(『大辞泉』p.2503.)とあり、「はたく=たたく」であるが、「はたく」は、「『たたく』の変化、『たたく』と『はらう』の混合か」(『新明解国語辞典第5版』)とある。
- 7) 動詞連語に関しては、奥田靖雄を中心に研究がなされてきた。言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』参照。
- 8) 『文検日本語文章能力検定4級徹底解明』p.119. の5W1Hの表
- 9) 「文検日本語文章能力検定」は、(財)漢字検定能力

協会の騒動で平成21年度第2回以降(平成21年8月以降)休止にいたっている。

参考文献

- ・奥田靖雄(「構文論の再出発」『ことばの研究・序説』むぎ書房 . pp.171-187 .
- ・言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房 .
- ・鈴木重幸(1972)「文法について」『文法と文法指導』むぎ書房 .
- ・中野はるみ(2004)『名詞連語「ノ格の名詞+名詞」の研究』亜細亜技術協力会海山研究所 .
- ・日本語文章能力検定(2006)『文検日本語文章能力検定4級徹底解明』株式会社オーク .
- ・日本語文章能力検定(2006)『文検日本語文章能力検定4級過去問題集平成18・19年度版』株式会社オーク .
- ・日本語文章能力検定(2006)『文検日本語文章能力検定4級過去問題集平成18・19年度版別冊』株式会社オーク .
- ・日本語文章能力検定(2008)『文検日本語文章能力検定4級過去問題集平成18・19年度版』株式会社オーク .
- ・日本語文章能力検定(2008)『文検日本語文章能力検定4級過去問題集平成18・19年度版別冊』株式会社オーク .